

北社会ニュース 19号

2006-1-18

発行：鈴木壮夫

(1) 北社会・年頭総会進行予定

- 18時30分 総会（前年度参加実績及び会計報告）
- 18時40分 世話人一人一人の今年の計画・スピーチ
- 18時50分 懇親会開催
出席会員によるお一人ずつ、60秒スピーチ
- 19時40分 各自のスピーチを話題にした懇談
- 20時00分 凱歌・校歌斉唱
- 20時15分 散会

(2) 来月以降の予定

2月15日（水）会員によるスピーチ

阿部孝氏（高27回）IBMビジネスコンサルティングサービス（株）

仮題 「日本におけるインターネットの利用動向」

私の年明け・アレコレ

(1) 成年生れの母と仙台雑煮

母は1910年（明治43年）生れの成年。4月に96才になります。一昨年秋、開設されたグループホームで日々感謝の言葉を口にしながら生活しております。家族が手におえなくなった親を他人に託し、自分達は平穏に暮らすという「後ろめたさ」は常に脳裏をよぎります。ですから、プロテスタントで元牧師のホーム長さんには週に一度、母を訪問した時必ずお会いして、家族の私達ができること、入所者のお役に立てることをお聞きしております。昨秋も園芸ボランティアの方々が庭で栽培したソバを石臼で碾くとお聞きしたので、店を臨時休業にし、一家総出でホームの特設打ち場でそばを打ち、天麩羅をあげて皆さんに召し上がっていただきました。

正月の仙台雑煮。今年も母に食べてもらいたくて、大晦日のそば屋の喧騒から半日も経っていない元旦の早朝、女房とホームに向かいました。母の仙台雑煮は海の幸・山の幸が彩りあざやかに盛られています。川越生れ、育ちの女房にきちんと伝承された料理の一つで今年も入所者の皆さんに召し上がっていただきました。ノドに餅がからまないよう、小さく切って、ゆっくりゆっくり食べて下さいと声を掛けつづけ、無事に食べ終わりました。緑内障で視力を失った母は「彩り」をめぐることはできませんが、「味」には十分に納得したようでした。手応えのあるスタートを今年も切ることができました。

一週間前、ホームが毎月発行している「福音の園だより」が届いた。加齢に伴う認知症状の進行で「笑顔」が奪われることを心配して今年は「あなたの笑顔が見たい」を合い言葉にスタッフ一同でケアに専心すると決意が記されていた。今年も私達は外のスタッフで。

(2) 高血圧・サイレントキラーと脅されて

1996年に“卒サラ”して早くも10年間、バカは風邪も引かぬ、栄養価の高いソバを食っているから健康には恵まれていると大見得を切った年賀状を投函し終わった師走に献血に行った。ここ数年、“やや高い”とは云われ続けた。当日、係員とのやりとりでカットしたせいもあるが血圧は172/97、年内中に医者に行くよう云われた。翌日、12月28日より初めてノルバスク錠という降圧薬を服用するハメになった。約3週間服用して血圧は146/56になった。多忙な時期だったが時間を生み出して「高血圧」関係の本を2冊パラパラと読んだ。2000年にガイドラインが改訂され140/90以上が高血圧とされ、投薬治療開始と定義されたらしい。これにより、高血圧「患者」は全国で5000万人。市民・患者の立場で医療を考えるよりも、製薬会社主導になっているとの指摘もあった。140/90の基準値の根拠あいまいさにも疑問がある。血圧計を購入、家庭で測定して、独力で改善したいと決意しました。そば屋のオヤジが高血圧では格好が付きません。どうなるでしょうか！

(3) 石原慎太郎「太陽の季節」から50年。

50年前の今頃、私は上杉山中の三年生、二高の受験が目前に迫っていました。勿論、芥川賞という文学界への登龍門も知っていました。翌日か翌々日かの河北新報に「太陽の季節」という小説に「障子に突き立てる」場面があるという記事が掲載された。よくわからなかったが既成のものを否定する「反動的」なことが都会ではモテるらしいと男子の仲間で秘かな話題になった。障子を突き破れた、「気持良かった！」という者もあらわれた。先月、同期・ピンピン会の有志が集い酒を呑んだ。「障子」が話題になった。三条中卒の名物男から提案が出された。夫婦同伴でピンピン会を開催する。会場に障子を持ち込み、片側にオバンを集め、障子を挟んだ反対側で我々ピンピン会一人一人が障子に突き立て、紙を破って先端を向こう側に差し出す。その先端を見てオバンが「うちのダンナ！」と当てるというバカげた提案。聞いていた全員、バカだとは思った。でもそれ以上に、姉菌の「鉄筋」が太く・何本も助けてくれなかったらとても無理だなあ・・・同級生は楽しい！

(4) 推薦図書： 津本 陽著 「名をこそ惜しめ」 文藝春秋 1800円

吉田直哉先輩が読売新聞に書評を寄稿されておりました。400頁の分厚い本です。

第二次世界大戦・激戦地硫黄島で、戦力はるかに劣る日本兵が米軍に大打撃を与え得たのはなぜか。戦後60年、日本人の本質。渾身の戦記です。

この戦いの核心は日米の戦力比2対7000（当時の日本軍参謀の証言）という絶望的な状況下、二万人近い将兵が摂氏60度を越す熱気と硫黄の臭気の地下に総延長18キロの壕を掘り、そこにこもって「敵は地上にあり、友軍は地下にあり」という特殊な戦闘を続けたことでした。本土を目指す圧倒的火力の米軍。半年間立ちほだかった二万人の「貴様らには殺されんぞ！」の叫び。史料収集も脱帽すべき精密さで、日本人がたった60年でこんな大事を忘れるわけにはいかないと吉田先輩は書評を結んでおられました。

(5) 高校サッカー初優勝・滋賀県野洲高校 山本監督

守旧派からボロカス言われながら信念を貫いた。観客はお金を払って来てるんだから、それなりのプレーをやれ！年が明けて半月、唯一のスカッとしたニュースでした。